

『死者の中からの復活』井上隆晶牧師

イザヤ書 25 章 6～10 節、マタイによる福音書 27 章 62～28 章

### ①【墓を開ける天使】

婦人たちが日曜日の朝早くに墓に行くと、大きな地震が起こり、天使が天から降ってきて墓石を転がし、その上に座って彼女たちに言いました。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。」（マタイ 28：5～6）地震とは土台が動くことです。私たちがこの世の中で確かだと思っていたことがひっくり返るような出来事が起こったということです。天使は人間が閉じた墓の石を脇へ転がしました。婦人たちは死んだイエス様を、その遺体を求めてやってきたのです。みんな死んだら終わりだと思うからこそ、遺体を亜麻布で丁寧に巻き、その中に防腐剤としての没薬を入れ、婦人たちも遺体に香油を塗るためにやって来たのです。でもイエス様は「自分は三日目に必ず復活する」と言われました。その言葉を信じていたらそんなものは必要ありません。弟子たちや婦人たちの誰もが本気で御言葉を聞いておらず、誰も本気で信じていませんでした。でも主は言われたとおり三日目に復活しました。復活とは魂だけが天国に昇ることではなく、肉体と魂が一体であるからだ全体が栄光化する、神化する、変容することです。墓に体はなく、布だけが丸めて置いてあったからです。その後、婦人たちはよく分からないまま、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行くと、イエス様が前に立っていて「おはよう」と言われました。彼女たちは近寄り、イエス様の足を抱き、ひれ伏しました。「おはよう」は直訳では「喜びなさい」「挨拶をします」です。死んだ人間が生き返るわけですからもっと別の挨拶はないのかと思いますが、イエス様にとって復活は朝の挨拶のように当たり前のことだったのです。復活の出来事ってたんたと起こっています。紅海が割れるような劇的なシーンがあるわけではなく、とても静かです。

人間は、必ず死んでしまう命しか知りません。しかし、キリストの命は死を飲み込んでしまう命でした。つまり必ず生きることになる命がここにあると聖書は宣言しているのです。彼は神だからです。神は死にません。この世は、この命を知らず、気づいていません。そして命でもない物を必死に集めています。もし「必ず生きることになる命＝永遠の命」を貰えたら、この世での生き方は変わり、苦悩も耐えられるのではないのでしょうか。この世から聖書を読むのではなく、聖書のメッセージからこちらの世界を見る必要があるのです。

そんな馬鹿な、復活などない、迷信だといって笑う人もいるでしょう。もしこの世が全てなら、この世は何と不公平なつまらん世界でしょう。生まれながらの障害児たち、災害で死んだ人たち、戦争で犠牲になった人たちは不幸です。悪い事をして裁かれず、大きな顔をしている人もいます。私は神の国、永遠の世界、

神が支配される正しい国があることを信じます。人間は甦るための準備期間としてこの世に生まれてきたのです。

## ②【ガリラヤ=信仰の基本に帰りなさい】

イエス様は婦人たちに「恐れることはない。行って、私の兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこで私に会うことになる。」(マタイ 28:10) と言われました。なぜ「恐れるな!」と言うのでしょうか。家族が亡くなると皆が同じような事を言います。「もっと優しくしてあげれば良かった。」死という犠牲を払うことで自分の罪が見えてくるのです。弟子たちはイエス様を裏切って逃げました。「自分は見捨てた」「約束を破った」と、自分の罪と弱さが分かったと思います。人間は失敗をするものです。でも失敗しても終わりではないと神は言って下さいます。一緒にやり直そうと言ってくださいます。神が待っているからこそ帰れる、赦して下さるからやり直すことが出来るのです。では、なぜガリラヤに行けばイエス様に会えるのでしょうか。ガリラヤとは地名ですが、彼らが最初にイエス様と出会い、話を聞き、従った場所です。つまり信仰のスタート地点です。私たちにあって信仰のスタート地点とは教会であり、礼拝であり、聖書です。キリストが信仰のスタート地点で待っておられるのは、もう一度私たちと共に天国への旅をするためです。繰り返しによって私たちは強くなります。何度も聖書を読み、礼拝し、何度も聖餐をいただくことで初めてキリストが見えてくるのです。

●今まで何度も聖餐式をしてきたのに、先週、パンを裂くことの意味が分かりました。分配しやすいように切っているのではないのです。ゴルゴタの丘でイエス様が脇腹を槍で刺されたように、祭壇の上でイエス様の体である聖パンは裂かれるのです。正教会では聖餐に五つの丸いパンを用います。その一つを取り、ナイフで刻印の左右を刺して裂いて言います。「屠り場に引かれる小羊のように、毛を刈る者の前に物を言わない羊の様に、彼は口を開かなかった。」「捕らえられ裁きを受けて彼は命を取られた。…」そして四角い部分に切り出し言います。「彼は命ある者の地から断たれた。」お皿の上にその四角のパンを置き、司祭はパンを裏にして十字の形に裂いて「神の小羊、世の罪を担う者は、世の命と救いのために裂かれる」と言います。再び表にしてパンの右側をナイフで刺して言います。「一人の兵士が槍で脇腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。」聖餐の度に、キリストが献げられたことを再現しているのです。キリストという最高のものが献げられ、私たちの罪を贖うのです。

アリストテレスは「習慣とは繰り返された運動であり、習慣が人間の性格や品性をつくる」と言っていますし、日野原重明先生は「習慣に早くから配慮した者は、おそらく人生の実りも大きく、習慣をあなどった者の人生はむなししいものに終わってしまいます。…よい習慣をからだに覚え込ませればよいのです。」と言っています。礼拝、聖書、聖餐、祈祷の基本に帰るのです。基本が崩れている人は、生活が崩れ、人生が崩れます。基本を大事にした人は必ず成長します。

### ③【キリスト神があなたのために戦われる】

復活が分からないのは、イエス・キリストを単なる人間、私たちと少し違うくらいのヒーローだと思っているからです。カルトも人間として読んでいます。そうやって聖書を読むと分からなくなります。キリストを神だと思って聖書を読めば、すべてが解決します。彼がなぜ一言で病気を癒せたのか、なぜ自然界を従わせることができたのか、なぜ悪霊は彼に従ったのか？彼が人となった神だからです。神が人を救いに来たのです。救われないはずがありません。神の血が流されたのです。清められないはずがありません。神を殺すことなどできると思いますか？蟻が太陽にけんかを売っているようなものです。近づいただけで死んでしまいます。古代の祈祷文はこう書いています。

・「イエスよ、地獄はあなたを迎え入れ、死んだ者が神であり、釘の傷を受けた者が全能者であることを見て、悩み、もだえ、口がきけなくなりました。」

神はわざと人間に負けたのです。キリストの死は、犠牲の死であると共に、復活を教えるための死でした。叩いても蹴っても、どんなに苦しめられても、甦るものがあることを示されたのです。

私たちは50日間祈り続け、聖書をこれでもかというほど読みました。ひれ伏して願ひ続けました。変われなくてもやるだけのことはしたのです。イスラエルの民は紅海とエジプト軍にはさまれてどうにもならなくなった時、モーセは言いました。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。…主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。」(出エジプト 14:13) 戦うのは私たちではありません。キリストです。キリストが私たちのために戦います。私を苦しめる罪、死、悪と戦われます。私たちは静かにして、主が私に何をなさるか見るだけです。

●三浦綾子さんはこんなことを書いています。「直腸がんになったときに、わたしは今まで味わったことのないような平安を与えられました。高いものには高いお金を払わなくてはならないように、この素晴らしい平安はやはり何かにならないと得られないのかなあと思うような平安を与えられました。」「キリスト教の愛は、厳密にいうと『神ご一任』のことであつて、神の愛だけなんです。」

すべてをキリストにまかせて良いのです。肩の力を抜いて、罪を犯してしまう弱い私をそのままキリストにおまかせしましょう。単純になり、子どもの様になってキリストを信じましょう。彼が私たちにすばらしいことをして下さいます。それを楽しみに待ちましょう。